症 例

特異な形態を呈した若年者大腸癌の1例

愛媛県立今治病院外科

矢 野 達 哉 佐 川 庸 窪 園 隆 坂 東 康 生

今回、われわれは特異な形態を呈した若年者大腸癌の1例を経験したので報告する。症例は26歳の女性、イレウス症状にて来院。精査にて横行結腸癌と診断、イレウス管にて減圧を図りつつ、Neoadjuvant chemotherapy を行い、根治術を施行した。摘出標本では横行結腸は完全閉塞に陥っていたが閉塞部の長さは5mm程であり、肉眼的に明らかな隆起性病変、潰瘍性病変は認められず、肉眼型は5型と考えられた。組織学的には粘膜面ではごく小範囲に高分化型腺癌の所見を認めるのみであったが、粘膜下層以下ではより広範囲に癌細胞が浸潤していた。本症例は第1度近親者に大腸癌患者はいないが、HNPCCの発端者である可能性もあると考えられた。

索引用語：若年者大腸癌, hereditary nonpolyposis colorectal cancer (HNPCC)

緒 言

近年、大腸癌症例は増加傾向にあるが、若年者の大腸癌は比較的稀である。今回、われわれは特異な肉眼的形態を呈した若年者大腸癌の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者：26歳、女性。

主訴：腹痛、嘔吐。

家族歴・既往歴：特記すべき事なし。

現病歴：平成7年4月下旬より心窩部痛あり、近医にて投薬を受けていたが、症状の改善なく、5月1日より嘔気・嘔吐出現、近医にてUGI施行されたが、その後、排便なく、腹痛増強、摂食不能となり、5月15日当科を受診した。

入院時検査所見：血液検査では特に異常は認められず、CEAも正常範囲内であった。

注腸透視（図1）：横行結腸脾彎曲部の口側約30cmの部位にapple core signを認めた。注腸前には同部より肛門側の大腸内にはバリウムは認められず、横行結腸はほぼ完全閉塞に陥っているものと考えられた。

臨床経過：横行結腸癌によるイレウスと診断し、イレウス管を挿入した。大腸ファイバーを施行したが、横行結腸が限局性に閉塞しており、biopsyでは粘膜面は正常であったが、粘膜下層に高分化型腺癌の浸潤が認められ、大腸癌と診断した。イレウス管にて腸管の

減圧を図ったが、イレウス管排液は非常に粘稠な便汁であったため、連日、イレウス管洗浄を行った。イレウス管挿入後1週間目にイレウス管は病変部に到達し、病変の口側腸管はほぼ完全に減圧された（図2）。その間、Neoadjuvant chemotherapy (5-FU 500mg/

図1 注腸造影：横行結腸脾彎曲部の口側約30cmの部位にapple core signを認めた（同部の口側に認められるバリウムは前医で施行されたUGIによるものである）。

1997年5月6日受付 1997年8月28日採用

図2 イレウス管挿入後1週間目の腹部X線：イレウス管は病変部に到達し、病変の口側腸管はほぼ完全に減圧されている。

day 5days) を施行し、5月30日手術を施行した。

手術所見：術中所見ではリンパ節が高度に腫脹しており、No 212リンパ節の腫大も認められたが、術中迅速にて転移は認められず、横行結腸切除術 (D3郭清) を施行した。

摘出標本 (図3)：横行結腸は脾彎曲部より約30cm口側で完全閉塞に陥っていたが閉塞部の長さは5mm程であり、肉眼的に明らかな隆起性病変、潰瘍性病変は認められず、肉眼型は5型と考えられた。

病理組織学的所見：粘膜面ではごく小範囲に高分化型腺癌の所見を認めるのみであった (図4a)。しかし、漿膜面ではより広範囲 (約12mm) に癌細胞の浸潤が認められた (図4b)。壁深達度はse, ly2, v0であったが、郭清したリンパ節52個には転移は認められず、Stage IIであった。

考 察

近年、診断技術の向上とともに大腸癌症例は増加傾向にあるが、若年者大腸癌 (以下、本症と略す) は比較的稀であり、その発生頻度は39歳以下では欧米で2～7%、本邦で10%前後との報告が多く、欧米より発生頻度はやや高いようである¹⁾²⁾。また、29歳以下の頻度は欧米では0.65～2.6%、本邦では1.2～5.6%と報告

図3 摘出標本の肉眼所見：横行結腸は完全閉塞に陥っていたが、閉塞部の長さは5mm程であった。

図4 a. 粘膜側の病理組織像 (HE染色, ×10)：ごく小範囲の粘膜面に高分化型腺癌を認めた。(※正常粘膜部, **癌部)。b. 漿膜側の病理組織像 (HE染色, ×10)：腫瘍の浸潤部ではかなり広範囲に癌の浸潤が及んでいた。

a
b

されている^{3)~7)}。男女比については男性の頻度が高いとの報告³⁾、性差はないとの報告もあり、一定してない

ようである。癌腫の占拠部位に関しては絶対数では直腸、S 状結腸に多いとする報告が多いようであるが²⁾⁵⁾⁸⁾、若年者では横行結腸に好発するとの報告⁹⁾、右側結腸の比率が高いとする報告⁹⁾もある。

本症の癌腫の大きさについて詳細に検討しているものは少ないが、山田らは3cm 以下は9.4% (全例、直腸の早期癌)、5cm 以内は53.1%、7cm 以内は21.9%、10cm 以内は12.5%、10cm 以上は3.1%であったと報告している⁴⁾。

病理組織学的特徴としては、高分化型腺癌の割合がやや低く、粘液癌、印環細胞癌の占める割合が高く、深達度の進んだ症例が多いという報告が多い^{1)~3)9)}。リンパ節転移も高率であり、しかも n2 以上の症例が多いと報告されている^{1)~3)}。手術時の肝転移の頻度には差はないが、腹膜播種は有意に若年者で頻度が高いと報告されている¹⁾。これは上記の如く、若年者では粘液癌、印環細胞癌の割合が高いことと関連があるのかもしれない。以上の如く、若年者では、より Stage の進んだものが多いわけであるが、その理由は本症の生物学的悪性度が高いこと、若年者では癌の診断が遅れることが原因と考えられる。しかし今後、若年者の大腸癌検診に対する関心が高まれば、若年者と高齢者の進行度の差は少なくなるものと思われる。

一般に本症の予後は不良であるとされており、奥野らは本症の5年生存率は41.0%であったのに対し、対照群では55.7%であったと報告している¹⁾。中川らも各年齢層別の生存率を検討し、30歳以上の各年齢層は5年生存率が53%から68%の間にあり、その間には有意差が見られなかったが、30歳未満の大腸癌の5年生存率は29%であり、他の群と比較して有意に予後不良であったとしている⁷⁾。この理由は本症では治癒切除率が48~64.5%⁹⁾⁷⁾と低いことが一つの原因と考えられている。治癒切除が施行できれば必ずしも本症の予後は高齢者に比し、不良とは言えないとの報告が多いようである²⁾⁶⁾⁷⁾。

本症例は粘膜面の大きさが約5mm と非常に小さいにもかかわらず、全周性であり、壁深達度は se で粘膜下層以深に、より広範囲に癌細胞が浸潤していた。この癌細胞の浸潤様式は胃癌における Linitis plastica 型癌の組織発生に類似しているものと思われ、非常に興味深いと考えられた。肉眼型に関しては、本症では局限型の割合が低いとされているが、本症例は1~4型のいずれの肉眼型にも該当せず、5型と考えられた。また、家族性的大腸癌として最近、遺伝性非ポリポー

シス大腸癌 (hereditary nonpolyposis colorectal cancer; HNPCC) がよく検討されている¹⁰⁾。本症例は HNPCC の本邦における診断基準の第1度近親者 (親、子、同胞) に大腸癌患者を認めるという定義を満たしていないが、HNPCC の特徴である50歳未満の若年発症、右側大腸癌であるという特徴を有しており、HNPCC の発端者である可能性は否定できないと考えられた。

結 語

- 1) 特異な形態を示した若年者大腸癌の1例を経験した。
- 2) 若年者大腸癌は一般的に予後不良とされているが、本症例は Stage II であり、長期予後が期待できるものと考えられた。
- 3) 本症例は HNPCC の発端者である可能性もあると考えられた。

文 献

- 1) 奥野匡有, 池原照幸, 梅山 馨他: 若年者大腸癌の臨床病理学的検討。日消外会誌 19: 2397—2402, 1986
- 2) 寺部啓介, 酒向 猛, 近藤達平他: 若年者大腸癌の臨床病理学的検討。日臨外医会誌 45: 1574—1578, 1984
- 3) 越智敬善, 浅井俊夫, 三竹正弘他: Cancer Family Syndorome の1例を含む若年者大腸癌の臨床病理学的検討。癌の臨 33: 386—391, 1987
- 4) 山田 肅, 高橋 孝, 林 章彦: 若年者の下部消化管癌—若年者大腸癌—。胃と腸 7: 881—888, 1972
- 5) 陣内傳之助, 安富正幸, 戸谷拓二他: 若年者大腸癌。外科治療 23: 121—126, 1970
- 6) 立川 勲, 渡辺 成, 相馬 智: 若年者大腸癌症例の臨床病理学的検討。消外 6: 649—653, 1983
- 7) 中川英刀, 吉川宣輝, 吉川 守他: 30歳未満の若年者大腸癌の検討。日臨外医会誌 57: 528—532, 1996
- 8) 裏川公章, 磯 篤安, 安積靖友他: 若年者大腸癌の臨床病理学的検討。日臨外医会誌 51: 898—903, 1990
- 9) 石川 啓, 梶原啓司, 岩崎啓介他: 20歳未満若年者大腸癌の2切除例。外科 56: 109—112, 1994
- 10) 豊田和広, 岡島正純, 土肥雪彦他: 大腸癌家族歴陽性大腸多発癌の検討。日臨外医会誌 57: 298—302, 1996

A CASE OF COLON CANCER IN A YOUNG ADULT PRESENTING
IN AN UNPRECEDENTED FORM

Tatsuya YANO, Teiri SAGAWA, Takashi KUBOZONO and Yasuo BANDO

Department of Surgery, Ehime Prefectural Imabari Hospital

We report a case of colon cancer in a 26-year-old woman presenting in an unprecedented form. The patient was admitted to the hospital because of ileus. The transverse colon was completely obstructed. We inserted an ileus-tube and reduced the intestinal pressure. After neoadjuvant chemotherapy, we performed a curative operation. Macroscopically, the length of the obstructed portion was 5 mm and there were no elevated or ulcerative lesions. Microscopically, there was well differentiated adenocarcinoma in a narrow extent of mucosa, but cancer cells widely invaded the subserosa. It is possible to be the originating case in hereditary nonpolyposis colorectal cancer (HNPCC).